

JICA's World

JULY 2013 No.58

7

特集 エネルギー

未来を照らす力



my photo

子どもたちと農村の未来

from Bangladesh バングラデシュ



どこを見渡しても人、人、人…。国土は日本の4割ほどだが、人口は約1億5,000万人。人口密度は世界一ともいわれるバングラデシュで、私は青年海外協力隊員として活動している。

写真は、首都ダッカの南東にある農村コミラの子どもたち。彼らのお父さん、お母さんの世代までは7～10人兄弟、はたまたそれ以上もざらだったというが、今となっては2、3人、多くても5人ぐらいだ。

少しずつ変化を見せるバングラデシュだが、いつの時代も子どもたちは元気いっぱい。はだして駆け回り、畑でクリケットをし、近所の子をまるで実の兄弟姉妹のようにかわいがる。私のような外国人を見つけると、好奇心をむき出しにして走り寄ってくる。

そんな愛らしい彼らの姿がこの国にいつまでも残り、農村の明るい未来を支える力になることを祈るばかりだ。



撮影：山岡麻美（バングラデシュ／青年海外協力隊）

あなたの作品募集中！

「my photo」では、あなたが撮影した写真を募集しています。貧困や環境問題などをテーマにした写真、国内外問わず国際協力の最前線で活動に励む日本人や途上国の人の姿、テレビや新聞ではなかなか報じられない土地の風景や人々の暮らしなど、国際協力や開発途上国を身近に感じられる写真を、撮影時のエピソードを添えてご応募ください。応募作品の中から毎号1枚、本コーナーで紹介させていただきます。

応募条件 ①応募者本人が撮影した作品に限ります。②被写体に関する肖像権は、応募者の責任において了解が得られているものとします。③写真は、解像度が300万画素以上（目安）で撮影されていること、また画像の記録形式はJPEGを推奨します。

応募方法 お名前、連絡先（電話番号とEメール）、エピソード（300～350字）、記名の可否をご記入の上、写真とともに応募先アドレスまでEメールでお送りください。
*応募作品は本コーナーのほかに、事前確認の上でJICAの広報活動に活用させていただく場合があります。ご記入いただいた個人情報はこれら以外の目的では使用いたしません。また、応募作品はご返却いたしませんので、あらかじめご了承ください。

応募／問い合わせ先

jica-photo@idj.co.jp

(JICA's World 編集部宛)

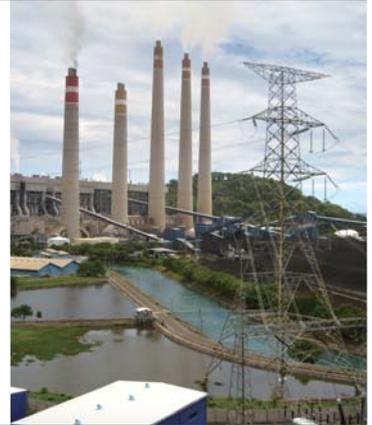
Contents

02 my photo 子どもたちと農村の未来 バングラデシュ

04 特集 エネルギー

未来を照らす力

最先端技術でクリーンな社会を インドネシア
生まれ変わる火の国 アゼルバイジャン
平和の明かりをともしたい シエラレオネ
地方の人々に笑顔を運ぶ ブータン
世界のエネルギー 裏!? 事情



18 JICA STAFF 久下 勝也 JICA産業開発・公共政策部 資源・エネルギーグループ

19 JICA UPDATE

20 PLAYERS

太陽光で 自然に優しい生活を

NPO法人ジュレー・ラダック



22 地域と世界のきずな 環境に優しい電力をつくる 九州地方

24 JICA Volunteer Story 猪野 孔太 青年海外協力隊／南アフリカ／電気・電子設備

26 特別レポート 北澤豪さん 国づくりの勢いを感じる in 東ティモール

28 ココシリ 「ここが知りたい」 いろんなトピックを分かりやすく解説!

30 地球ギャラリー

ラオス

光と影のはざままで



37 イチオシ! 本・映画・イベント

39 MONO語り ビーズ作りで明日への力をはぐくむ

40 私のなんとかしなきゃ! 真山 仁 小説家



JICAのビジョン

すべての人々が恩恵を受ける、
ダイナミックな開発を進めます

Inclusive and Dynamic Development

表紙

© imagewerksRF/amanaimages

光の源となる電球とコンセント。
エネルギーを届けるために、世界
各国の技術者たちが知恵を絞
り、日々汗を流している



エネルギーが 足りない!?

目覚めの一杯のコーヒー、電車やバスでの通勤・通学、オフィスでのパソコン作業、夜道の助けとなる街灯……。一日を通じて、何をするにも必要なのが「エネルギー」。私たちの生活を照らす光となり、モノを動かす力にもなる。もはや人間の生活は、エネルギーなしでは成り立たないと言っても過言ではない。

しかしこのエネルギー、自然に生み出されるものではない。先人はまきで火をおこし、風や水、さらにその土地に眠る資源などを駆使して、エネルギーをつくる方法を模索してきた。そして今、世界全体のエネルギー消費量は約120億トン（一次エネルギー、石油換算、2010年）。約半世紀の間に、なんと3倍以上にも増えている。そう、文明が発展すればするほど、経済が活発になればなるほど、より必要となってくるのがエネルギーなのだ。

しかし、このまま使い続けると、石油、石炭などの化石燃料はあと数十年で底をついてしまう。私たちは今、いかに効率的に、環境に負荷のかからない形でエネルギーを確保するかを考えるべき時にきている。

特集 エネルギー

ナミビアの国立公園に設置された送電線。開発途上国では、都市から地方まで、すべての人に電力を届けるべく、さまざまなドラマが繰り広げられている

私たちの生活に必要な不可欠なエネルギー。
しかし、世界ではいまだ4分の1の人に電力が届いていないという現実がある。
世界が共に成長し、明るい未来をつくるためにエネルギーとどう向き合っていくべきか。
今ここで、立ち止まって考えてみたい。

未来を照らす力

世界のエネルギー資源 なくなるまで あと何年!?



エジプトの砂漠に吹く風を利用した風力発電



ウラン

533万トン

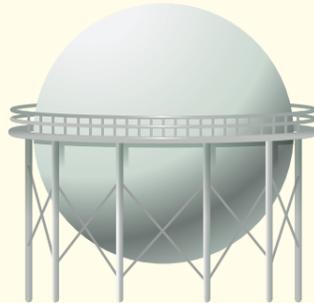
(2011年1月)



石炭

8,609億トン

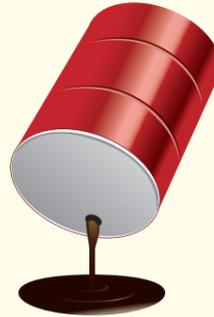
(2011年末)



天然ガス

208兆m³

(2011年末)



石油

1兆6,526億バレル

(2011年末)



ケニアで日本企業の機材を導入し地熱発電を推進

生活に光のない
開発途上国

とはいえ、日本では「スイッチを押せば電気がつく」。それが当たり前の生活だ。しかしここで知ってほしいのが、世界には、電力が行き届いていない人が4分の1もいるという現実。そのほとんどが、開発途上国で暮らす人々だ。

日本の技術力と経験を 途上国に伝える

この数年は、中国やインドなどの新興国を中心に経済成長が加速し、電力需要は増える一方。発電所、送配電線などのインフラ整備が追いつかず、それらのシステムを運用できる技術者なども育っていない。

エネルギーの安定供給は国の発展のカギであり、社会にもたらされる「光」は、そこで生きる人々の希望の象徴。それは途上国政府も認識している。しかし、これを可能にするには、莫大な時間と費用、高度な技術が必要となる。そこで各国は、国際社会の支援を受けながら地道に歩みを進めている。

えられている。彼らに手を差し伸べることは、当然の責務ともいえるのではないだろうか。

日本は第二次世界大戦後、高度経済成長期の電力需要の急増に官民の力で乗り越え、1970年代の石油危機以降は、国を挙げて省エネルギー対策に取り組んできた。その経験に基づく技術力の高さが、途上国のエネルギー事情の改善に一役買っている。

ただやみくもに、設備をつくれればいいわけではない。そこでJICAが協力の柱としているのが「3L Policy」。それは、コスト削減(Low Cost)、二酸化炭素の削減(Low Carbon)、リスクの低減(Low Risk)を視野に入れたエネルギー開発だ。これらすべてをすぐに達成することは実に困難だが、各国の事情を踏まえ、インフラ整備から人材育成まで、包括的な支援を進めている。

世界が共に成長し、発展していくために。すべての人々にエネルギーが届くよう、途上国の現場で挑戦が続いている。



経済成長著しいインドの送電線

(注)可採年数=確認可採埋蔵量/年間生産量
出典: BP統計2012、OECD・IAEA「Uranium 2011」

日本のエネルギーの歩み

東京電力の前身である東京電燈株式会社が設立されたのは1883年(明治16年)。日本で第一号目となる電力会社で、その4年後に本格的に事業を開始しました。一方、ニューヨークとロンドンでは、世界初の石炭火力発電所が82年に完成。近代的な発電技術が発達してきたのがこの時期で、日本は開国後に世界の技術革新に急速に追いつきました。

日本も火力発電からのスタートでした。しばらくは石炭が主流でしたが、1912年に

は水力が逆転します。そして60年代にまた石炭に戻り、その後、石油に移行。今日は、石炭、原子力、天然ガスを主な資源として電力供給を行っています。

戦後につくられた9電力体制※は、世界的に見ても珍しい枠組みです。日本の電力事業の成功のカギは、このように民間が主導で進めてきたことにあります。表向きはGHQの指示だったようですが、コンセプト自体はその何年も前に、日本人により提案されていました。つまり9電力体制は、日本の電力体制から生まれてきたものと言えます。電力不足や公害問題などの困難に見舞われながらも、石油危機まで各電力会社がパフォーマンスを高めるために工夫を重ね、それが互いの刺激となって良いサービスが生まれました。

日本の電力セクターの強みは、発電所などの設備というよりも、電力の系統運用能力ではないでしょうか。電力を安定供給し、停電も少なく、もし起こったとしても復旧が早い。かゆいところに手が届く、それが日本のサービスです。50年後の世界を見据えて、エネルギーとどう向き合っていくか。途上国とも協力しながら考える時代にきています。

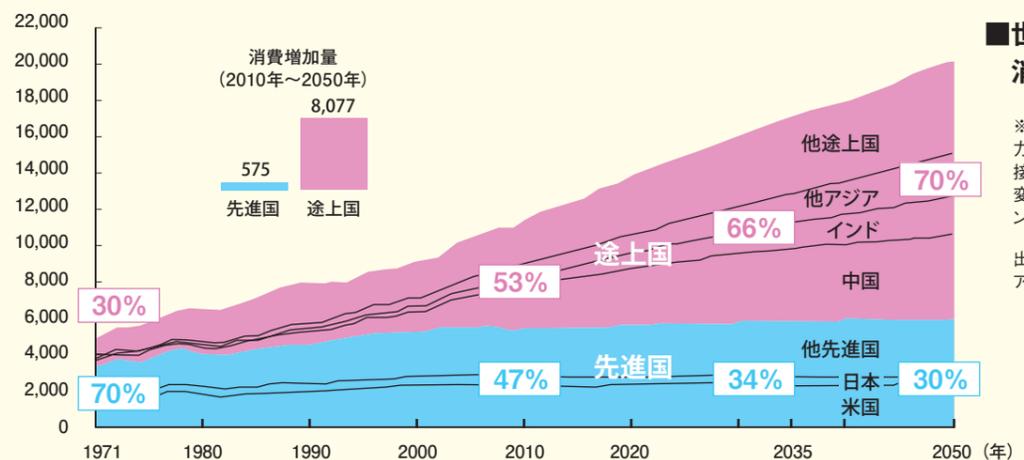
一橋大学大学院
商学研究科

橋川 武郎教授



※全国を9つ(北海道、東北、東京、中部、北陸、関西、中国、四国、九州)に分け、各地域の電力事業を民間の電力事業者が運営。1972年に沖縄電力が設立され10電力体制となった。

(石油換算100万トン)



世界の一次エネルギー消費量

※石油、石炭、天然ガス、ウラン、水力、太陽光、地熱など、自然から直接得られるエネルギーのこと。これを変換・加工して得られる電気・ガソリン・都市ガスなどは二次エネルギー。

出典: アジア/世界エネルギーアウトック2012



CCTを導入した新しい発電所の建設候補地。インドネシア政府関係者と自然・社会環境などを調査した

ンサルタント事業の立ち上げを任されたのが斎藤さんだった。以降、人々に電力を届けるため、インドネシア、フィリピン、スリランカなどを飛び回っている。

そんな斎藤さんらが中心となり、今、インドネシアで新たな挑戦が始まっている。それが環境に優しい石炭火力発電「クリーン・コール・テクノロジ」（CCT）の導入だ。

国の資源を活用した環境に優しい電力開発

インドネシアはアジアでも屈指の資源国。しかし石油に関しては、2000年代に入って国内需要の増加、採掘量の伸び悩みから輸入国に転じた。一方、石炭はいまだ世界有数の産出国。日本にとっては、オーストラリアに次いで第2位の輸入国という位置付けだ。

電力を安定的に供給するため、低コストの石炭を主なエネルギー資源として開発していく。そう決断した政府は、近年の電力需要の増加に石炭火力発電で対応することに。しかし問題となったのが二酸化炭素（CO₂）排出量の増加だった。



JICAはインドネシア政府と共催でセミナーを実施。CCT導入の意義について活発な議論が行われた

そこで白羽の矢が立ったのが、燃費が良く、CO₂排出量も少ない発電技術、CCTだ。「従来の火力発電より高温高压で石炭を燃やすため、これに耐え得る合金の設備が必要になります。導入には最先端の技術を要求され、発電所の建設コストも上がります」と中部電力火力部の安井稔部長。しかし、発電の効率が上がれば、長期的な視点で見るとトータルコストは安くなる。それを理解してもらおうべく、現地の政府関係者とも、幾度となく議論を重ねた。そして次第に、「安かろう悪かろうではなく、良いものを取り入れたいという意気込みを、現地の人たちから感じるようになりました」と安井さんは話す。

さらに重要となるのは、CCTを効率的に運用できる人材の育成だ。「発電所はお金があれば建てることができるとも、でも人材育成はそうはいきません。どれだけ機械化されても、カギとなるのは、人なのです」と安井さん。中部電力では入社から約5年間、社内の研修センターも活用しながら、発電所運営の基盤となる発電・補修技術を確実に習得させる仕組みをつくっている。その経験を踏まえ、今必要なのは、最先端技術はもちろん、それを使いこなす、人なのだと言え続けた。

両国が知恵と技術を駆使し、約

1年間の調査を経て2025年を見据えたロードマップが完成。CCTの導入に向けてすべきことが洗い出された。

その成果を受けて今、ジャワ島西部で進んでいるのがインドラマユ石炭火力発電所の建設計画。これが実現すれば、インドネシア初のCCT導入型の発電所となる。「エネルギーの効率化と環境負荷の軽減。この2点において、日本の技術と知見を提供できることはまだまだあるはず。中部電力としても、引き続き海外事業に積極的に取り組んでいきます」と斎藤さんは意気込む。

地域の資源を生かしたエネルギー開発と、地球を守るための環境への取り組み。その両立のため、インドネシアでは今、クリーンな電力づくりへの熱が高まっている。



名古屋市の南、約40キロに位置する碧南火力発電所。1号機の運転開始から22年、故障も少なく発電効率を維持している。視察に訪れたインドネシアの関係者らは日本の技術力とCCTの効果を実感したようだ



ジャカルタ

インドネシア
from **INDONESIA**
**最先端技術で
クリーンな社会を**

インドネシア最大のスララヤ石炭火力発電所。日本製のタービン、発電機が使われている

東南アジアの成長をけん引するインドネシア。慢性的なエネルギー不足の解決の糸口となるのがこの土地に眠る「石炭」。そこで今、進められているのが環境に配慮した石炭火力発電の導入だ。

拡大する都市、不足する電力

街中に一歩足を踏み入れると、南国特有の蒸し暑さ、人々が発するエネルギーに圧倒される。目の前には高層ビルが立ち並び、通りはどこも車で埋め尽くされている。

ここはインドネシアの首都ジャカルタ。日本人にとって、インドネシアと言えば、人気のリゾート地・バリ島の印象が強いかもしれない。しかし東南アジアの成長をけん引するこの国は、首都を中心に急速な都市化が進んでいる。その姿は、先進国となら変わらない印象すら受ける。

この10年の経済成長率は平均5・5%。その勢いはとどまるところを知らないが、彼らの前に大きな壁が立ちほだかる。首都の渋滞を見ればそれは明らか。インフラ整備が追いつかず、あらゆるところで「ほころび」が生じているのだ。

慢性的な電力不足もその一つ。この国では停電も「日常」だ。海外からも多くの企業が進出しているが、事業を拡大するにも電力が足りていない。

「最初にインドネシアに来たの

は1993年。当時に比べると、街の様子は劇的に変化しましたね」。そう話すのは、中部電力株式会社国際事業部の斎藤芳敬部長。当時の彼のミッションは、小水力発電をいかに効率的に導入するかを調査すること。JICAのプロジェクトで日本の電力会社からインドネシアに派遣されたのは、斎藤さんが初めてだった。「土木が専門だったのですが、なぜか海外担当になって。そこから中部電力が海外に事業を展開し始めたのが90年代。この時、海外コ



首都ジャカルタの中心部。経済成長のスピードにインフラ整備が追いついていない（撮影：久野真一）



建設中の2号機。ビニールシートに覆われた三菱重工業製のガスタービンと三菱電機製の発電機が据え付けられた

ヨーロッパのような石造りの建物が
並ぶバクーの街並み



アゼルバイジャン
from **AZERBAIJAN**
生まれ変わる火の国

旧ソビエト連邦の一国、アゼルバイジャン。
電力の8割以上を火力発電でまかなっているが、
発電所の老朽化が深刻な問題。
そこで、国のさらなる発展のカギとなるのが、新しい発電所の建設だ。



効率が悪い
年代物の火力発電所

火の国。これは、カスピ海に面するアゼルバイジャンの別名。岩から噴き出した天然ガスに落雷が引火したり自然発火したりする現象が太古から見られ、いつしか「火」を意味する古語「A z e r」



建設会社のプロジェクトマネジャーとその日の工事の内容を毎日確認する佐藤さん(右手前から3人目)

が国名の由来になったそうだ。そのいわれの通り、石油や天然ガスなどが豊富な資源国。旧ソビエト連邦の一つだったが、1991年に独立を果たし、石油・天然ガス産業に依存して成長してきた。

首都バクーを歩くと、重厚な石造りの建物が並ぶ。国民の多くはイスラム教徒だが、それを忘れてしまいうぐらい、そこはヨーロッパにいるかのような雰囲気だ。「バクーは「風の街」という意味。常にカスピ海からの風が吹いています。国も街の名前も、なんだか口

も見据えた新しい効率的な発電所。そこで日本の支援により98年から建設が始まったのが、シマル・ガス火力複合発電所1号機だ。燃料は自国に眠る豊富な天然ガス。送電時にロスが生まれないよう首都近郊に建設した。2002年から稼働し、首都圏の電力需要の約2割、400メガワットの電力を届けられるようになった。05年からは、同等の発電能力を持つ2号機の建設を進めている。

1、2号機共に、発電機を動かすガスタービンは日本の三菱重工業製。その強みは、コンバインドサイクル発電という最新の技術だ。発電時の排熱を再利用してさらに発電できる仕組みで、既存の発電所と比べて発電効率が格段に高くなる。

しかし、その性能を最大限に発揮するには、ガスタービンなどの主要機器と配管などの周辺部品を正確につなげなければならぬ。そこで佐藤さんは、現地の電力公社の職員や建設会社のスタッフ、ガスタービンの製造元である日本企業の社員などの間に立ち、工事のスケジュールを確認したり、現場を訪れて施工に問題がないか確認したり、安全管理ができていないかチェックしたりと忙しい。「旧ソ連時代の古い考え方の人もいて、安全管理や国際基準などをなかなか分かってもらえないという

マンチックですよね」。そう話すのは、この国で発電所建設に携わる佐藤光行さん(東電設計株式会社)。中国、インド、タイ、クロアチアなどで発電所の建設を支援してきた彼は、「変わり者だから海外でも行ってこい！」なんて言われて早20年、世界各地を飛び回っています」と笑う。

佐藤さんが初めてアゼルバイジャンに足を踏み入れたのは98年。首都近郊に新しい発電所を建設するためだった。

独立後、領土をめぐる隣国アルメニアとの紛争が94年まで続き、その間、新しい発電所の建設や送電線の整備といった電力セクターへの投資はほとんど行われなかった。その結果、停戦後に経済が回復し、電力需要が伸びても供給が追いつかず、ぎりぎりの状態だった。

「首都圏への電力は300キロも離れた発電所から送られ、送電の間に電力の一部が失われていました。さらに、80年代から使い続けてきたため、どんどん老朽化が進み、発電効率が悪くなっていったという課題もありました」と佐藤さんは当時を振り返る。

新しい発電所で
産業を支える

国の発展のために必要とされていたのは、将来の電力需要の伸び

苦勞もあります。でも今、この国は新しい国づくりに挑戦している。それに役立てると思うとやりがいがあります」と話す。

現在建設中の2号機からの電力は、首都近郊の大規模工業団地「スムガイトテクノロジパーク」にも供給される予定。石油・天然ガス産業への依存が強かったアゼルバイジャンだが、電気ケーブルやパイプといった高品質な工業製品の製造など、新しい産業の育成に力を注いでいる。この2号機が完成すれば、安定した電力供給が実現し、新たな産業の創出に貢献できるはずだ。

アゼルバイジャン全土にある古い発電所を効率的なものに変え、電力の安定供給を実現させていく。これこそ、この国のさらなる発展のカギだ。



すでに稼働しているシマル・ガス火力複合発電所1号機。首都圏への電力の安定供給に多大な貢献を果たしている

電気を安定的に供給するため、住民と協力して電柱を設置



新たな配電施設の設置についてNPAの職員と話し合う仁尾さん



維持管理が行われず動かなくなった発電機のエンジン

心の傷を癒やす 光の力

日本は世界で最も平均寿命が長い国。その一方で、最も短い国とされるのがアフリカ西部に位置するシエラレオネだ。

その背景には、この国の暗い過去がある。1991年、政府軍と反政府軍の間で内戦が始まり、約10年にわたり戦闘が続いた。約7万5000人の命が奪われ、約200万人が難民または国内避難民となった。

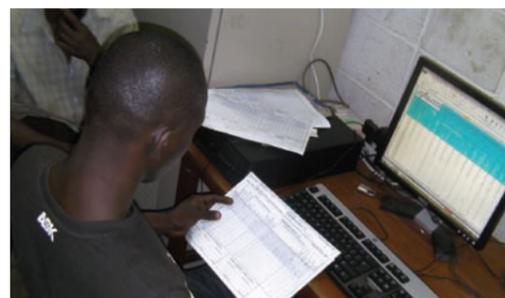
内戦は2002年に終結したものの、残されたのは荒れ果てた町。給水施設、病院、学校、発電所などは破壊され、夜になれば真っ暗。人々の心にも、暗い影を落としていた。

そんな国に、ある日、光が差し込んだ。忘れもしない07年4月27

日、独立記念日の夜、首都の中心部に街灯がともったのだ。それまで真っ暗だった町が一気に明るくなり、それはこの国の希望の光にも見えた。

しかし、それも首都の一角のみ。一般の家庭には、まだまだ電力が届いていなかった。内戦終結後も、発電所は廃墟となり、電柱は銃弾の跡が残った状態で放置されていた。

内戦の原因の一つとなった貧困を減らし、平和の定着を図るためにも、経済成長を支える電力は必要不可欠。そこで手を差し伸べたのが日本だった。今日まで、発電機の供与、配電線の整備など、日本のインフラ整備の技術力を生かした取り組みが進められてきた。



日本の支援で供与されたパソコンで、発電機の運転記録を管理

やる気を引き出す ベテランの指導

さらに、この国で多くの人に光を届けようと奮闘している日本人がいる。「施設の整備は進んできていますが、実際にそれを動かす人材が不足しているのです」。そう話すのは、長年にわたり、開発途上で電力施設の設計、施工などを手掛けてきた八千代エンジニアリング株式会社の松村昇さんと仁尾正さん。「老いてはますます壮なるべし」。2人とも、70歳を過ぎたベテラン技術者だ。

首都圏の電力供給を担うのは国家電力公社（NPA）。現在、600人ほどの職員がいるが、内戦の影響で技術者の育成が進まず、組織内に技術や知識が蓄積されていなかった。発電機は動かさずにはなし。維持管理が十分できておらず、故障も頻発していた。

このままでは電力の供給は安定しない。そこで、松村さんと仁尾さんが中心となり、NPAの職員に対して、発電や配電、機械の維持管理の方法などを指導している。

中でも力を入れているのが、発電機についての講習だ。「初めはみんな機械の図面も読めなかったんですよ」と松村さん。まずは徹底的に基礎をたたきこむことにした。そして次は、現場での実践。



発電機のエンジンに故障がないか調べる方法を伝える松村さん(左から2人目)

シエラレオネ
from **SIERRA LEONE**

平和の明かりをとりたい

約10年間続いた内戦の負の遺産。
それは、人々の生活を支えるインフラの崩壊だった。
彼らに平和の明かりを届けるべく、
日本と現地の技術者たちが奮闘している。



機械を部品ごとに分解し、一つ一つ丁寧に清掃。図面を見ながら、再び組み立て直していく。「あえて失敗する姿も見せます。それでも挑み続ける技術者の生きざまを伝えたいのです」と、仁尾さんは力強く話す。

2年間の厳しい指導にもめげず、毎日必死に学んできたNPAの職員たち。次第に機械の維持管理をスムーズに行えるようになり、仕事に対する意識も変わってきた。気合いあふれる日本の先輩の姿を見て、「自分もあんなりたい」と、何事にも積極的に取り組むようになってきたのだ。

そんな彼ら自身の努力もあり、この数年、シエラレオネの電力事情は大幅に改善。外を歩けば暗かった町に明かりがつき、家では扇風機が回り、テレビもつくようになった。子どもたちは夜でも勉強できるとうれしそうだ。

「この数年でNPAは変わってきました。でも例えて言うなら、まだハイハイの状態。自分の足で立ち上がるまで支えていきたい」と松村さんは話す。

内戦という暗い過去から立ち上がるようにしているシエラレオネ。その復興のシンボルとも言える平和の明かり。この国の人々の心を照らすべく、彼らの挑戦は続いていく。



配電設備のメンテナンスを行うBPCの職員。日本製の安全帯を着用

も配電線が届かない世帯には、太陽光パネルを設置して電気を届けたいです」。

そう苦労を話すのは、JICA 専門家の大類久里さん。これまで

配電網の整備自体は着々と進んでいるが、それを維持管理する人々がいなければ宝の持ち腐れ。そこで大類さんら7人の日本人専門家が取り組んでいるのが、ブータン電力公社（BPC）の職員の能力向上だ。

「課題を解決する力を養うため、BPCが取り組むべき6つの優先課題を彼ら自身で決め、原因を分

課題を見つけ 乗り越える力をほぐす

フィリピンやインドネシアでも、地方への電力供給を促す「地方電化」を支援してきた。「10年以上、地方電化にかかわってきた原点は、初めて明かりがついた時に見た人々のうれしそうな笑顔。日本では当たり前になった電気のありがたみを再確認し、その笑顔をもっと見られるためにできることをしたいと思っただけです」。

大類さんは電気が届いたブータンの地方の村々でも、たくさんの方々の笑顔に出会ってきた。夜には明るい光の下で大人を対象に識字教室が開かれるように。昼間は農作業で忙しい彼らは、学ぶ喜びをかみしめている。また、「家で充電できるようになったので携帯電話を買った。町に出稼ぎに行った子どもと連絡が取れてうれしい」という声も。人々の生活に、明るさをもたらされている。

BPC配電部長のノルブ・チェリンさんは、「あくまで私たち自身の力で対策を考えなくてはなりません。職員が一人となり、中に設置した配電線のトラブル対応や小規模水力発電所の保守管理などにも取り組んでいます」と頼もしい。地方で暮らす人々に電気を届け、笑顔を増やしたい。大類さんと思いを共有した彼らは、着実に前に進んでいる。

析し、具体的な対策を立てています。食べ物が増えて困っている人に食べ物をあげるより、作り方を教えた方がよい」といった意味のブータンのことわざ通り、私たちは答えではなく、解決方法の導き方を常にアドバイスしています」と大類さんは話す。

例えば、地方での電気料金の請求・徴収方法の改善。配電線を山奥の遠隔地まで延ばしたはいが、各世帯の電力使用量を調べるには時間も費用もかかる。電気料金を支払うにも、何キロも離れた町まで行かなければならない。

そこでBPCが検討している対策の一つが携帯電話の活用だ。BPCのコールセンターに顧客番号などをテキストメッセージで送ると、顧客情報を管理するデータベースにつながり、その世帯の電気料金が分かるという仕組み。試行錯誤しながらシステム構築を進めているところだ。



[右]山の中を通る配電線。急しゅんな地形のため、設置も維持管理も難しい
[左]BPC配電部長のチェリンさん(左)らとプロジェクトの進捗を確認する大類さん(右奥)。ブータンの省庁では民族衣装の着用が義務付けられている



太陽光パネルを屋根に取り付け、初めて電気を使えるようになった家庭。思わず笑みがこぼれた



ティンブー

広がる 都市と地方の格差

「明かりがついた！」

初めて電気が使えるようになった記念すべき日。村の人々に笑顔が広がる。

辺り一面、どこを見ても山、山、

山。ヒマラヤ山脈に囲まれたブータンならではの風景だ。ここマルハゼ村は、首都ティンブーから車で6時間、さらに山道を歩いて4時間もかかる。

こうしたブータンの地方では、都市に比べて、各家庭に電力を届けるインフラの整備が遅れている。人々はろうそくや灯油ランプを使っているが、それでは十分ではない。もちろん、電化製品など使えない。洗濯は手洗い、食材は乾燥させて保存食にするしかない。コメはまきを使って炊くが、火がおきるまで時間がかかり、室内はすすで真っ黒になってしまう。健康にも良くない。

そこでブータン政府が目指しているのが、すべての人に電気を引きわたらせること。世帯電化率100%という目標だ。2007年から日本やアジア開発銀行などの支援を受けて地方の配電網の整備を進め、05年に6割だった全国の世帯電化率は2012年には8割に達した。

しかし、3000メートル級の山々が連なる険しい地形。奥地に点在する集落に配電線を引っ張るのは、そう簡単なことではない。「目の前が見えても、道も橋もない。いったん谷に下り、また山を登らなければたり着けません。そんな場所に人力で電柱などを設置するのは一苦労。どうしても

灯油ランプの明かりはかなり暗く、細かい作業などはできない



太陽光発電で部屋の中がこんなにも明るく。家族だんらの時間が増えた



ブータン
from **BHUTAN**

地方の人々に笑顔を運ぶ

世界一幸せな国として知られるブータン。しかしその裏側で、都市と地方の格差という課題に直面している。電力もその一つ。地方にも電力を届けるため、ブータンの人々の挑戦が続いている。

① チュニジア



ラクダが運ぶ冷蔵ワクチン

ラクダの背に載っているのは太陽光パネル、脇にくくりつけられているのは冷蔵庫。その中には、なんと薬やワクチンが入っている。医師がラクダを連れて地方の村を訪れるアフリカ式の“動く診療所”だ。

② キルギス



牛ふんが資源に変身!

牧畜業が盛んなキルギスでは、毎日大量に出る牛ふんが大活躍。水と同量ずつ鉄製のタンクに入れて密封・発酵させ、バイオガスを発生させる。この国の貴重なエネルギー源だ。

③ ミャンマー



電力の安定は神頼み!?

電力インフラの整備が追いつかないミャンマーでは停電は日常茶飯事。そこで登場するのがこの国ならではの習慣。電力需要が増える夏のピーク時には、発電機が故障しないように毎日神頼み。なんと発電機の横にお供え物が!

④ フィリピン



太陽光発電で漁が可能に

約7,000もの島が点在するフィリピンでは、電力を配るのも一苦労。そこで使われているのが太陽光発電。バッテリーをつないで一日充電すれば、漁に使う集魚灯にも光が。夜の海を照らし、魚を集めるための漁師の必須アイテムだ。

世界のエネルギー裏!? 事情

エネルギーと一言で言っても、その国の気候や地形、資源によってさまざま。世界各地のエネルギー事情をのぞいてみよう。

特集 エネルギー
未来を照らす力

⑤ ナイジェリア



電柱が選挙の道具に!?

畑の真ん中にぽつんと立つ数本の電柱。よく見ると電線がない。選挙前になると、候補者が票集めのために「この村に電気を通しますよ」と電柱を建てるとか。しかし結局、そのまま電気が来ないことも…。

⑥ エジプト



観光産業を支える砂漠の箱

世界屈指の観光地、ギザの三大ピラミッドの砂漠地帯にたたずむ箱。その名も“KIOSK”。中には変圧器などが入っている。地に埋められた電線の中継点として、ピラミッド周辺の観光施設などに電気を送っている。

⑦ スリランカ



記念硬貨になった友好の証

日本の最先端の建設技術を生かし、2012年に完成したアッパーコトマレ水力発電所。両国の友好のシンボルとして、国交樹立60周年の記念硬貨に。



⑧ グアテマラ



水力発電で森と共存

グアテマラの山岳地域は香辛料カルダモンの産地。しかし、出荷前に大量のまきを燃やして乾燥させるため、森林破壊が進んでいる。そこで、代替りのエネルギー源として推進されているのが、山が蓄える豊富な水を使った水力発電。川から取った水に圧力をかけ、タービンを回して発電している。



ケニアの地熱地帯を調査する現地の技術者と久下さん(左端)

開発途上国の人々に 「光」を届けたい

世界には、いまだ電気が行き届いていない人がたくさんいる。JICA 産業開発・公共政策部の久下勝也さんは、開発途上国の電力不足の解消に向けて奔走している。

エネルギーを通して 開発途上国の問題を知る

小さいころから機械が好きで、世界最高峰の自動車レースのF1に憧れていました。将来はF1のエンジニアになりたい。その夢を実現するために大学は工学部に進み、エネルギーの研究に打ち込みました。

しかし勉強すればするほど、石油や石炭などエネルギー資源には限りがあること、地球全体に温暖化をもたらすこと、開発途上国には電気が使いたくても使えない人がたくさんいることなど、F1のような華やかな世界以外の部分が見えてくるようになりました。

まずは自分の目で現状を確かめようと、日本のNGOのボランティアツアーでウガンダとエチオピアを訪れました。訪問先は多くの子どもがHIV/AIDSで親を失った農村。電気は通っておらず夜は真っ暗。困っていた村人たちの姿を目の当たりにして、彼らの生活に光を当てられるような仕事がしたいと強く思うようになりました。

電力を求め 人々の声を聞く

入社6年目に配属されたのは、西アフリカのシエラレオネ。約10年間続いた内戦の終結から5年が経っていましたが、まだまだ復興が進んでいない状態でした。そこでJICA

は、この国の人々が何に困っているのか、どのような支援を求めているのか調査をすることに。でもどこに行っても、初対面は決まって「あなた誰?」「何ができるの?」という顔をされ、なかなか心を開いてくれません。私は何度も彼らの元に足を運び、時間をかけて話すようになりました。

聞き取りを通じて分かったのは、住民が最も困っていることのひとつが電力不足。以前は電気ができていたのに、内戦中に発電や送配電設備が壊れ、機能しなくなっていたのです。現地の国家電力公社(NPA)の職員に話を聞くと、「設備も人手も足りない。復旧に日本の力を貸してほしい」と。「これはもうやるしかない!」と、まずは電力設備の維持管理状況についての調査を始めました。その後、私は別の部署に異動になりましたが、2011年、その調査結果を基にNPAへの技術協力がスタートしました。

日本の技術力で 途上国に電力を届ける

そして2013年、産業開発・公共政策部で任されたのが、あのシエラレオネの技術協力でした。少しずつ成果が出始めたころで、住民やNPAの職員たちが喜んでいると知り、胸がいつぱいになりました。

貧困を減らすには経済成長が必要ですがそれを支えるのが電力です。しかし、世界



JICA産業開発・公共政策部
資源・エネルギーグループ
主任調査役

久下勝也
KUGE Katsuya

大学院修了後、2002年にJICAに就職。無償資金協力部(当時)、ガーナ事務所、シエラレオネ・フィールドオフィス、アフリカ部、総務部を経て、2013年3月から現職。

には、まだまだ電力不足に悩む国がたくさんあります。発電や送配電設備の整備、人材育成など、取り組むべき課題も盛りだくさんです。そこで私たちが目を付けているのが日本の技術力です。



シエラレオネの同僚たちと復興に力を注いだ久下さん(右端)

先日、ケニアの地熱発電所を視察したのですが、そこで活躍していたのが地下の蒸気でタービンを回す日本の発電プラント。自然エネルギーを使っているのが燃料を買う必要がなく、環境に優しく、継続的に安定した発電ができます。まさに今、多くの途上国が求めている発電技術。これを使わない手はありません。

日本にはこういった優れた技術がたくさんあります。途上国の電力供給に生かせるものがあれば積極的に活用したいと、関連企業に足を運んでいます。しかもこれは、日本企業にとっても、今後の海外展開に向けてのビジネスチャンスになる。日本の技術を活用して途上国の電力不足を解消する。このアプローチで、一人でも多くの人に電気を届けられるよう、日々の業務に取り組みしていきます。

第5回アフリカ開発会議(TICAD V)開催

01



パシフィコ横浜の会議場はJICAのアフリカのパートナーでにぎわった

6月1日から3日まで、横浜で「第5回アフリカ開発会議(TICAD V)」が開催されました。
 JICAは、前日を含む4日間、TICAD V公式イベントとして、「アフリカの包摂的かつダイナミックな開発」をテーマに19のセミナーを開催。産業開発、貿易・投資促進に加え、雇用、保健、教育、平和と安定、環境問題などの課題にどう効果的に対応していくべきか、各会場で活発な意見交換が行われました。
 2日の「アフリカの経済構造転換」をテーマにしたシンポジウムでは、JICA研究所とコロンビア大学政策対話イニシアチブ(IPD)の共同研究の成果が発表され、同大学のステイグリッツ教授が「アフリカが21世紀の課題に立ち向かうために重要なのは、産業開発を促進し、経済の構造を多様化させること」と強調しました。それを踏まえて、国際社会はどうアフリカを支援すべきかが熱く議論されました。



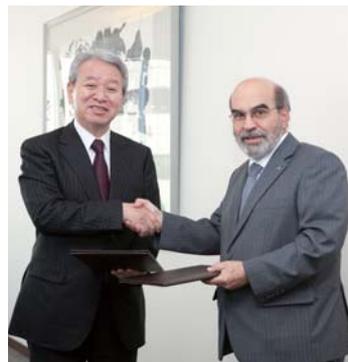
JICAが主催したセミナーの一つでは、若年層の雇用促進について話し合われた

また、同日の「アフリカの若者に明るい未来を」がテーマのセミナーでは、若年層の雇用促進についてパネルディスカッションを実施。ガボンのオランダ大統領、南アフリカのズマ大統領、タンザニアのキクウエテ大統領が自国の若年層の失業対策と課題を説明し、キム世界銀行総裁やカベルカ・アフリカ開発銀行総裁、田中明彦JICA理事長なども交えて議論が行われました。
 会合期間中、JICAは、27人の国家元首・首脳級を含むアフリカ44カ国の代表と会談。各国での日本の協力の現状や、今後の支援の方向性について意見を交わしました。
 今後JICAは、インフラ開発のための65億ドルの資金協力、産業開発のための3万人の人材育成、2000万人の子どものための教育の質の向上など、TICAD Vで発表された日本のアフリカ支援を推進するため、具体的な取り組みを進めていきます。

02

FAOと連携し食料問題への取り組みを強化

6月4日、JICAは国際連合食糧農業機関(FAO)と業務協力協定を締結しました。2008年の食料価格の高騰以降、食料安全確保や栄養改善は世界共通の問題という認識が高まっています。食を支える農業の成長には、農産物の生産から収穫後の処理、食品加工、マーケティング、農家の生計向上まで幅広い取り組みが必要。そこで、食料・農業分野の専門機関として幅広い知見を持つFAOと、開発途上国での事業経験を蓄積してきたJICAが連携することで、より効果的な農業・農村開発の実現が期待されています。
 特にアフリカでは、08年にJICAが関係機関と共に立ち上げた「アフリカ稲作振興のための共同体(CARD)」を通じてさらに連



田中JICA理事長(左)とダ・シルバFAO事務局長

携を強化。また、アフガニスタン農業灌漑牧畜省の能力強化を支援するJICAのプロジェクトにFAOの専門家を派遣する計画です。

03

ミャンマーへの円借款契約の調印

6月7日、JICAはミャンマー政府と総額510億5200万円(計3件)の円借款を貸し付ける契約に調印しました。

この円借款を通じて特に強化される分野が、国内でも特に緊急性の高い道路や給水といったインフラの新設・改修です。これは、少数民族が暮らす地域を含め、貧困層が多い地方の住民の生計向上と貧困削減を目的としています。

また、国内最大の都市ヤンゴン地域では、深刻な電力不足が住民の生活や企業の経済活動の障害になっているため、発電所や変電所の改修を通じて、安定した電力供給を目指していく計画。さらに、工業団地の整備が進むヤンゴン郊外のティラワ地区でも、電力施設や港湾ターミナルなどの整備事業を進め、海



タイ国境近くに暮らすカレン族の人々。少数民族への支援も民主化を進めるカギとなる(撮影: 谷本美加)

外からの直接投資や貿易の拡大を支える基盤づくりを支援していく方針です。



ラダックに暮らす人々。「奥地まで足を運んで支援してくれるのはありがたい」



国際協力の担い手たち

NPO法人ジュレー・ラダック

太陽光で自然に優しい生活を

近代化に伴い、伝統的な生活が失われつつあるインド北部のラダック地方。
NPO法人ジュレー・ラダックは、この土地の人々と共に、
自然と調和した生活を取り戻すべく奮闘している。

急速な近代化が 生み出すひずみ

インド最北端、ヒマラヤ山脈のふもとに「秘境」と呼ばれる場所がある。ラダック地方。青く澄んだ空の下、3000〜7000メートルの高山が連なり、冬はマイナス20度、地域一帯が雪で閉ざされる。40年ほど前までは、中国、パキスタンとの国境紛争の影響で治安が悪く、外国人の立ち入りが禁じられていた地域だ。



光を効率的に集めて調理。炒め物も煮物もでき、パンも作れる



JICAのアドバイザー派遣制度を活用し、ソーラーキッチンが村人の役に立っているのかを共同調査。村のニーズに合った適切な支援だと再確認できた

そんな陸の孤島に暮らす人々がいる。「ジュレー（こんには）！」
誰もが気さくに、優しい笑顔であいさつを交わす。「私たちは、牛やロバ、ヤク、馬、羊、鶏などの動物たちと暮らしてきました。畑仕事の労働力としてはもちろん、ふんを肥料に使ったり、肉を食べたり、毛皮を衣服として使ったり、自然の恵みに支えられた生活でした」。そう話すのはラダック出身のスカルマ・ギルメットさん。外の世

界から孤立していても、自給自足の生活が成り立つ「循環型」の社会。それが、ラダックの誇るべき伝統だった。「でもその暮らしが大きく変わってきたのです」とスカルマさんは顔をゆがめる。1970年代、インド政府がラダックを観光地として解放することを決定。この土地を近代化させようと、開発の波が押し寄せた。「道路ができて、電気が通って、生活は便利になり始めましたが、そう事はうまく運びませんでした。これまでな

自然エネルギーで ラダックの伝統を見直す

目指すのは、ラダックの伝統を保ちながら、近代的な技術をバランスよく取り入れること。そこでスカルマさんが目を付けたのが太陽光だった。太陽の熱エネルギーをうまく活用できれば、寒さの厳しいラダックで人々の助けになる。環境にも優しい。ラダックは年間300日が晴れ。これを生かさない手はない。

そんなことを考えながら、ラダックに里帰りしたスカルマさんは地元でNGOを訪れた時、銀色のパラボラアンテナのような物を目にする。中心には、なぜか傘。傘の部分が太陽光を反射させ、中心に熱を集めていた。「正直、こんなもので調理ができるのかと。でもかまどに新聞紙を入れてみたら、ポツと火が付いたんです」とスカルマさん。「これだ！」と思った。

早速、このソーラーキッチンを普及させようと動き出す。まず対象にしたのが、ラダックの中でも特に標高の高い村々。近年の開発の影響が少ない地域で、冬の寒さが特に厳しく、熱エネルギーを最も必要としていた。

しかし、ここは山岳地帯。道路が整備されておらず、そう簡単には近づけない。ロバに乗り、急な坂道を歩き、2、3日かけてやっとたどり着く。「そんな奥地まで支援できるのは、土地勘のあるジュレー・ラダックの強みです」



JICA基金で設置されたソーラーウォーターヒーター。太陽光で温められたガラスの管に水を流して温水にする

とスカルマさん。村人たちの自主性を引き出すため、ソーラーキッチンも彼らにも費用の一部を負担してもらおうとした。

これまで12の村で約170台を設置。「簡単にお湯を沸かせるから、寒い冬でも体を洗える」「簡単に動かしているんな場所です」。そんな喜びの声が上がっている。

さらに「世界の人びとのためのJICA基金」※を使って、太陽光を当てることで一回に100リットルもお湯を沸かせるソーラーウォーターヒーターも10カ村に導入した。太陽光を通じて、自然を大切にしようという伝統が少しずつ、そして確実に、よみがえってきた。

自然エネルギーを使うことで、自分たちの生活を見つめ直してほしい。そんなスカルマさんの思いが村人たちに届き、今、ラダックが生まれ変わるうとしている。



村人たちに自然と共存しながら暮らすメリットについて語るスカルマさん

かったプラスチックなどのごみが増えたり、新しくできた発電所から油が漏れ出したり。農業でも機械や農薬などが次々と導入され、自然と調和した生活は崩れていった。ラダックの伝統的な生活を取り戻したい。スカルマさんは現地で環境保護などのボランティア活動に参加。そんな中、一人の日本人女性との出会いをきっかけに来日。この縁で、日本人々と協力して地元ラダックを救いたい。2004年、日本でNPO法人ジュレー・ラダックを設立した。

※国際協力に関心のある一般の方からの寄付金を、開発途上国の貧困削減や環境保全などの取り組みに活用する制度。詳細はホームページ(www.jica.go.jp/partner/private/kifu/index.html)を参照。



九州地方

福岡、佐賀、長崎、大分、熊本、宮崎、鹿児島 の7県。面積は約4万km²、人口約1,300万人。域内への電力供給は九州電力株式会社が管轄。「スマートコミュニティ」を目指す北九州市を筆頭に、代替エネルギーの導入・実証事業などに積極的に取り組む。そのノウハウを開発途上国に還元すべく、JICA、公益財団法人北九州国際技術協力協会、地元企業や大学などが協働で環境分野の研修も数多く実施している。

新しい電力をつくる

低炭素化社会の実現に向けて、環境に優しいまちづくりに力を入れる九州地方。この5月、この地域のエネルギー対策を学ぶため、6カ国から研修員が訪れた。

九州地方



北九州市内に設置されている太陽光パネルを視察

知恵と工夫から 電力を生み出す

青々とした新緑が広がり、心地良い風が吹く5月下旬。私たちを乗せたバスは、標高1046メートル、佐賀県中央部にそびえ立つ「天山」を上っていく。目指すは、唐津市内にある天山発電所。九州の三大揚水式発電所の一つだ。

車内はアジアからアフリカ、東欧まで、計6カ国からのJICA研修員でにぎわっている。「エネルギーと環境問題。その両立の術をエネルギー立国の日本に学びにきました」とパキスタン・シンド州政府エネルギー局のアジズ・ウラーさん。研修のテーマは、低炭素化社会実現のための発電技術。約1カ月間、環境先進都市である北九州市を拠点に、九州各地のエネルギー事業を視察。高度経済成長期の公害の歴史を乗り越え、自治体と住民が一体となって環境対策を進めてきたこの地域は、今回の研修に最適な舞台だ。

バスは山の中腹で止まった。天山発電所は操業27年、周辺の約20万世帯に電力を送り続けている。水を使って電力をつくる。環境に配慮した発電方法だ。「電気を水の形でためる」のが揚水発電※1の特徴です。そう説明するのは、この発電所を運営する株式会社九電ハイテック佐賀支社の西財市さん。地下のトンネルを進んでいくと、見上げるほどの高さの歯車やタービンなどが所狭しと並べられている。どれ

環境に優



天山発電所の地下に設置された発電機は、佐賀市内から遠隔操作している

も維持管理が行き届いていて、まだまだ現役だ。

さらに研修員の目を引いたのが、壁にかけられている工具パネル。何十もの工具が大きさや用途で分けられ、整然と並べられている。「どの機材が故障しても、発電所はストップしてしまいう。的確に、効率よく維持管理をするために5S※2は基本です」という西さんの言葉に研修員たちは納得の様子。「揚水発電は新しい発想。自分の国でも地形が合うところがあれば試してみたい」とナイジェリア連邦電力省のデイビッド・アダムさんは意欲を見せていた。

新たなエネルギーへの 挑戦

景色はガラリと変わって沿岸部、一行は伊万里市に向かった。次の訪問先は、佐賀大学海洋エネルギー研究センター。日本で唯一の海洋エネルギーの研究施設だ。海水の上層と深層の温度差を使って発電するという、海洋国家の日本ならではの技術。元佐賀大学学長の上原春男教授をリーダーに、20年以上にわたり研究が進められてきた。

「日本では沖縄県の久米島に実証機があり、2015年には商業化する計画です」と同センターの松下政裕助教。「海の資源を使うとなると、当然、漁師さんからも理解を得る必要があります。双方にメリットがある仕組みを考えなければなりません」。その言葉を



シミュレーターを使って揚水発電の仕組みを学ぶ研修員

聞き、研修員たちはうなずいていた。

そして、なんと、いつも相手は自然。安定した電力供給のためには、気候などの外的要因を踏まえた高度な分析が必要だ。視察の時間が過ぎても、積極的に質問を投げかける研修員たち。パングラデシュ電源開発委員会のカムール・アハメッドさんは「夜は暗闇でろうそくという生活を送っている人も少なくない。すべての人に光を届けること、環境に優しいエネルギーをつくることが目標です」と意気込んでいた。そのほかにも、太陽光、火力、風力、地熱など、約1カ月かけて九州地方のさまざまな発電施設を訪ねた研修員たち。「エネルギーの専門家として非常に優秀でやる気がある。今回の研修を



海洋エネルギーの実験設備について説明する松下さん(右端)。「産業界とのネットワークづくりも重要です」

「青年海外協力隊」

猪野 孔太

INO Kota

PROFILE

1986年高知県出身。高校卒業後、自動車部品メーカーに就職。退職後、2011年6月から2年間、青年海外協力隊(電気・電子設備)として南アフリカで活動。

「保全マン」として 協力隊に参加

「導線をつないでランプを点灯させてみよう！」
 ここは南アフリカの職業訓練校。電流の流れる向きに合わせて、生徒たちが導線とスイッチ、ランプをつないでいく。スイッチを入れてみると。パッと明かりがいった。その瞬間、歓声にわく教室。嬉しさのあまり、何人かが踊り始めた。
 そんな活気あふれる実習を担当するのが、青年海外協力隊員の猪野孔太さんだ。

JICA Volunteer Story



実習でモーターの仕組みについて説明する猪野さん。生徒たちは興味津々だ（撮影：渋谷敦志）

「実習を通じて、技術を身に付けてほしい」

アフリカの中でも、経済成長が著しい南アフリカ。この国の工業化を支える人材を職業訓練校で育成すべく、青年海外協力隊の猪野孔太さんは実習の導入に取り組んだ。



工業高校を卒業後、自動車部品メーカーに就職した猪野さん。会社の研修所で電気機器の組み立てや修理方法について学び、工場の機械を管理する「保全マン」となった。一方、人の役に立ちたいと、プライベートでは介護ボランティアなどにも参加していた。「日本にこれだけ助けを必要としている人がいるなら、開発途上国ではどうか？。そう思い始めたんです」。自分の技術で途上国の人たちの役に立てないかと、協力隊への参加を決めた。

実習の導入で 生徒のやる気を引き出す

配属されたのは、南アフリカ東部のカムシュシュワにある職業訓練校。アフリカの中でも成長が著しいこの国の工業化を支える人材育成の場だ。

猪野さんが任されたのは、電気機器の修理や配線の技術などを学ぶ電気科の授業だった。「最初に来た時、ここは本当に職業訓練校なのか？と驚きました」と猪野さん。実践的な技術を指導し、卒業後に即戦力として働ける人材を育てるのが職業訓練校のはず。しかし、この学校では座学がほとんど。機材や教員が足りず、実習が行われていなかったのだ。生徒は思うように技術が身に付かず、やる気を失い、授業をサボるようになっていた。そうなるも当然、卒業しても就職は難しい。そんな「負のスパイラル」に陥っていた。

これを断ち切るには、実習の機会を増やすことが必要。そう考えた猪野さんは、まず、実習に使う機材を確保することにした。ランプ、導線、スイッチ、工具…。実習室の倉庫には、壊れたり古くなった機材がガラクタとして山積みになっていた。「どれも捨てるにはもったいない。よく見れば使えるものもある」。



a. 手作りの電気パネルを使って電気回路の仕組みを指導。実習の課題は生徒のレベルに合わせて設定している
 b. 実習室の倉庫に積まれた教材や工具を整理整頓する
 c. 猪野さんの手にかかればガラクタもこの通り。段ボールを土台にランプの配線を学ぶ機材を製作
 d. 生徒からの要望に応じて、放課後や休日にも補習授業を行った

ここからが保全マンの本領発揮。壊れた電気機器を分解し、部品を再利用して新たな機材としてよみがえらせる。電気回路を学ぶために必要なパネルがあれば、段ボール箱を土台に活用するなど、工夫を凝らして機材を作っていた。
 しかし、次に問題となったのが機材の管理だった。ある日のこと、実習後にドライバークラスの本拠地。猪野さんは、「ドライバークラスは機械を直すのに欠かせない道具。戻ってくるまで実習はできません」ときっぱり伝えた。ドライバークラスはなくなったのはクラスの連帯責任。猪野さんは彼らに「気づいてほしい。ドライバークラスのぶれない姿勢に、生徒たちが動いた。猪野さんのぶれない姿勢に、生徒たちが動いた。ドライバークラスはジュース一本くらいの値段。犯人は名乗り出なかったが、「コウタの実習を受けたい」と、みんなが弁償することにしたのだ。この話は他の電気科の生徒にも広まり、盗難がピタッとなくなった。
 さらに猪野さんは、実習をより充実させるために、同僚の教員たちと積極的に協力。彼らが授業に集中できるように、事務作業を手伝ったり、実習のやり方を教えたりした。「座学で得た知識を実習で試せば、生徒はすぐ勉強になるし、楽しいものです」とほほ笑む猪野さん。学習意欲も高まり、実習の授業にも活気が出てきた。その話を聞き、地元企業の技術者などが実習の視察に訪れるように。生徒が技術を身に付け、就職へとつながっていく。そんな「正のスパイラル」が生まれてきたようだ。
 「こういう授業をみんな求めていたんです」と生徒たち。「自分の努力が認められたようで、とても嬉しかったです」と猪野さんは話す。彼が導入した実習、何事にも屈しないプロの技術者の精神はこれからも引き継がれていくはずだ。



北澤豪さん

in 東ティモール

独立後の国づくりを支える

21 世紀最初の独立国、東ティモール。日本人にも人気の観光地、バリ島から飛行機で2時間ほどのところに浮かぶこの国の面積は、わずかに1万5000平方キロメートル。東京千葉、神奈川、埼玉を合わせたほどの大きさの小国だ。

「独立前も後も、みんな大変な思いをしてきたはずなのに明るい。前向きでいいね」。真っ青な空の下、そう話すのはサッカー解説者の北澤豪さん。JICA Aオフィシャルサポーターとして、これまで訪れた国は14カ国。2013年、

最初の訪問国として選んだのは、2002年に独立を果たした東ティモール。この国の歩みを自身の目で確かめるべく、現地に向かった。

今から約10年前、ポルトガルやインドネシアなどによる占領の時代が終わり、人々は未来への明るい光が差し始めたと思った。しかしこの国が直面したのはインフラの不足。長年の紛争で町は荒廃し、人々の生活を支える設備・サービスがほとんど機能していない状態だった。

北澤さんが最初に訪れたのが、国の玄関口の首都ディリ。生活物資の85%

国づくりの勢いを感じる

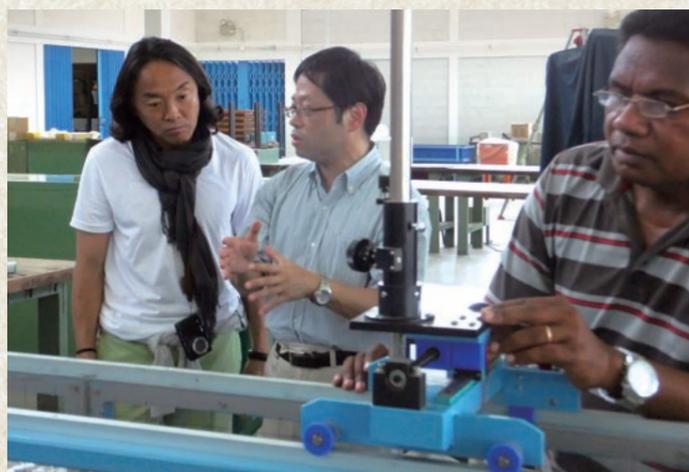
日本の協力で整備されたディリ港を視察する北澤さん



長年の紛争を経て、2002年に独立を果たした東ティモール。新たな国づくりがスタートして10年。次のステップへと歩を進めるこの国をJICAオフィシャルサポーターの北澤豪さんが訪れた。



地元の人たちと一緒に田植えに挑戦!



東ティモール国立大学工学部では、朝位孝二専門家が担当する土木の講義を見学

を海外に依存している東ティモールにとって、ディリ港は「生命線」だ。そこで日本は06年、紛争により老朽化が進んでいた港の改修を開始。物流コストの低減や安全性の向上、輸出入量の増加が目的だった。貨物の積み下ろしに立ち会った北澤さんは、「今の設備で大型船舶も十分利用できる?」「1日にどのくらい輸入できる?」などと質問を投げかけていた。

また、市内の浄水施設では「日本の支援で住民が水を利用できるようになったのは素晴らしい」と喜びながらも、市民からの料金徴収システムが整備されていないことを聞き、「利用者

草の根に届くニッポンの力

東ティモールでは、青年海外協力隊の活動も光った。この国の多くの人の生活を支えているのが農業。いかに付加価値を付けて「売れる」ものを作るか。この課題に住民と共に立ち向かっているのが鈴木哲史隊員。東ティモールの特産品の一つ、ココナツを使った加工品作りに取り組んでいる。

その一つがバージンココナツオイルだ。早速、その製造現場に足を運んだ北澤さん。



バージンココナツオイルの製造は、村の人たちが協力合って取り組む

ちようど住民たちが、ココナツの実からオイルを抽出しているところだった。細かいごみは一つ一つ取り除いていく。すべて手作業だ。「こんなに手間をかけているなんて。きつとおいしいものができるね!」と驚きの様子。1瓶3ドルで販売していると聞き、「もっと値上げしてもよいのでは」とアドバイス。日本でもココナツオイルは健康ブームで人気が高い。北澤さんもお土産にとたくさん購入していた。

また、NPO法人東ティモール医療友の会（AFMET）も、JICA A草の根技術協力事業を通じてココナツを使った加工品作りに取り組む。AFMETのモットーは「あげない、教えない、無理強いしない」。海外からの支援に頼らず、住民たちが自らの力で病気への適切な対応・予防ができるようになるこ

とを目指している。

そんなAFMETが力を入れているのが、手洗いの習慣の普及だ。そのきっかけの一つとして導入しているのがココナツオイルを使ったせっけん作り。北澤さんが訪れた日も、村の女性たちは作業の真ん中で、皮膚病予防にも効果てきめんで、すでに住民たちからも重宝されているのだとか。「地元の人たちの生計向上にもつながり、健康にもいい。一石二鳥ですね」と北澤さんは感心していた。

最後は、北澤さんの途上国訪問では恒例のサッカー教室。まだ決して裕福とはいえない東ティモールだが、ボールをける子どもたちの姿は生き生きと輝いていた。国づくりの土台をしっかりと築き、一歩一歩着実に進んでほしい。そう強く感じた旅だった。



地元の子どもたちとサッカーに汗を流す北澤さん

ココシリ

「ここが知りたい」
国際協力に関係する
いろんなトピックを
分かりやすく解説します！

「第5回アフリカ開発会議(TICAD V)開催」 国際会議

アフリカの成長を 官民で後押し



アフリカとの関係強化について演説する安倍総理



横浜にアフリカ51カ国の代表が一堂に会した

第5回アフリカ開発会議(TICAD V)

会期：2013年6月1～3日
開催地：横浜市
成果文書：「横浜宣言2013」

「横浜宣言2013」のポイント

- ① 民間セクター主導の成長を促進
- ② インフラ整備の促進
- ③ 農業従事者を成長の主人公に
- ④ 持続可能かつ強靱な成長を促進
- ⑤ 万人が成長の恩恵を受ける社会の構築
- ⑥ 平和と安定、グッドガバナンスの定着

6月1～3日、「第5回アフリカ開発会議(TICAD V)」が横浜で開催された。1993年から5年に一度、日本主導で開催されてきたこの会議。アフリカ54カ国のうち51カ国の関係者が来日し、うち39カ国は大統領や首相など首脳級が出席。さらに、パング連事務総長、ズマ・アフリカ連合委員長、キム世界銀行総裁、クラーク国連開発計画(UNDP)総裁をはじめ、74の国際機関、地域機構、NGOなどから4500人以上が参加した。

今回のテーマは「躍動するアフリカと手を携えて」。安倍晋三内閣総理大臣とアフリカ連合議長の高レマリヤム・エチオピア首相が共同議長に据えた。初日の開会式では安倍総理が登壇し、「アフリカに必要なものは、民間の投資とそれを生かす官民の連携だ」と述べ、日本は今後5年間で政府開発援助(ODA)約1.4兆円、最大約3.2兆円を官民の取り組みによるアフリカへの支援に充てると発表した。その上で、インフラ整備に6500億円を投じ、産業人材を3万人育成する方針を打ち出した。安倍総理は「日本とアフリカは今や、良きパートナーを超え、コ・マネジャー(共同経営者)。互いに成長し合う関係になった」とし、今後の日アフリカ関係の発展に期待感を示した。

また、横浜ではTICAD V開催前日から、さまざまな関連行事が行われた。5月31日には「ソマリア特別会合」が開かれ、食料不足や治安の悪化が深刻なソマリアの国づくりを支えるべく、日本での研修実施など、直接支援の再開が表明された。

6月2日の「人間の安全保障シンポジウム」では、すべての人が予防や治療、リハビリなどの保健医療を受けられる「ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ(UHC)」を推進していくとし、アフリカでの人間の安全保障の強化を通じて、経済成長を実現していきたいと呼びかけた。また期間中に安倍総理は、アフリカ各国の首脳や国際機関の代表者など56人と会談し、各地域の情勢や個別の開発課題などについて意見交換した。

最終日には、今後5年間に達成すべきアフリカ開発の方向性と具体策をまとめた「横浜宣言2013」を採択。インフラ整備や人材育成、科学技術の向上などを通して経済成長の基盤を固め、民間の投資拡大による成長を促進することが明記された。また、アフリカの多くの人々の生活の糧である農業の生産性向上、保健や教育、水・衛生などの分野におけるミレニアム開発目標(MDGs)達成への取り組み、平和と安定に向けたガバナンスの強化などが早急に支援すべき重点分野として提示された。その中で、アフリカ自身の自助努力、女性や若者の力を引き出すこと、人間の安全保障の推進は一層重要視すべきだとされた。

アフリカの開発について幅広い議論が行われ、閉幕した今回のTICAD V。経済成長を後押しし、その恩恵をアフリカに暮らすすべての人々に届けられるよう、日本はアフリカと手と手をとって歩んでいく。

安

倍晋三内閣総理大臣は、5月24～26日、日本の総理としては36年ぶりにミャンマーを公式訪問した。現地では首脳会談のほか、ヤンゴン郊外のティラワ経済特区予定地の視察、アウン・サン・スー・チー国民民主連盟議長との表敬などを通じて、両国が築いてきた信頼関係を新たな次元へと高める上で有意義な訪問となった。

政策

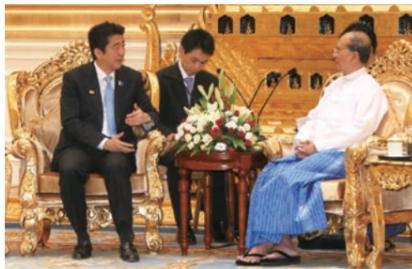
約90分にわたるティン・セイン大統領との会談では、「ミャンマー政府が全力で進めている民主化、法の支配の強化、経済改革、国民和解といった取り組みに対し、日本は官民の総力を挙げて支援していく」と安倍総理が決意を述べた上で、少数民族支援を含む生活向上・貧困削減、人材育成・制度整備、インフラ整備を優先分野とし、円借款や無償資金協力、技術協力の合計910億円の支援を表明。これに対しティン

「安倍総理がミャンマー訪問」 両国の関係を強化し 新しい国づくりを支援

ン・セイン大統領は、ミャンマーの発展に向けた日本の協力の感謝の意を示し、「日本の支援を得て改革を一層進めたい」と述べた。

また、今回の安倍総理の訪問に合わせ、約40の日本企業・団体の代表もミャンマーを訪問。「日本・ミャンマー経済セミナー」が開催され、両国の経済関係者約540人が参加した。安倍総理も出席し、「ミャンマーの発展には、現地への技術移転や地元社会との調和、環境保全意識に定評のある日本企業の協力が不可欠」とし、日本企業への期待を示した。

アジアの、最後のフロンティアとして、これから新たな生産拠点・市場として期待されるミャンマー。日本はミャンマーの国づくりを幅広い分野で支援しながら、日本経済の成長も目指していく方針だ。



安倍総理とティン・セイン大統領(写真提供：内閣広報室)



「日本・ミャンマー経済セミナー」では、経済面での結び付きの強化がうたわれた(写真提供：内閣広報室)

ミャンマー DATA

首都：ネーピードー
面積：約68万km²(日本の約1.8倍)
人口：約6,242万人
言語：ミャンマー語
宗教：仏教、キリスト教、イスラム教など
主要産業：農業
1人当たり国内総生産(GDP)：832ドル
実質GDP成長率(2010年)：5.43%

国

国際協力は私たちの生活とつながっている。日本で暮らす人々に国際協力を身近に感じてもらうため、「佐藤隆太の地球元気！」がテレビ東京系列でスタート。国際協力は開発途上国だけでなく日本にも活力を与えるというメッセージを発信していく。

ODAを知る

新番組『佐藤隆太の地球元気!』 世界も日本も元気に! 国際協力の取り組みを紹介

官を演じた経験に加え、マレーシアで活動する日本人専門家とインターネットで電話で交流。海外での支援の苦労や醍醐味について聞いた。

2回目(6月14日)と3回目(6月21日)の放送では、青年海外協力隊員が登壇。ラオスで活動した隊員OGの榎田麻美さんが現在取り組むのは、東日本大震災の被災地、宮城県でのボランティア。仮設住宅での生活支援などに途上国での経験がどう生きているかに迫った。また、中米のグアテマラで子どもたちに野球を教え、スポーツを通じた成長を願う中元治樹隊員とは、地球の反対側、との交流を楽しんだ。

今後も番組では、JICAやNGO、大学、企業、地方自治体などによるバラエティー豊かな国際協力を取り上げる予定。元気印の佐藤さんと、国際協力に携わる人々との交流が楽しみたい。

佐藤隆太の地球元気!



ナビゲーターの佐藤隆太さん。テレビ東京系列で毎週金曜の夜9時54分から放送(時間は変更あり)。再放送は土曜日12時25分からテレビ東京系列(テレビ東京、テレビ大阪、テレビ愛知、TVQ九州、テレビ北海道、テレビせとうち)で放送。

7月放送予定

- 「世界で活用される母子手帳」
- 「自転車できれいな水を」
- 「ラオスで感じる日本の涼」
- 「横浜で世界の食事」

→詳細は番組ホームページへ
www.tv-tokyo.co.jp/chikyugenki/

光と影のはざままで

地球ギャラリー vol.58

Laos

[ラオス]

写真・文＝山田しん(写真家)



C



E



D



F

C.早朝の托鉢は荘厳な雰囲気
D.メコン川沿いにはおしゃれなカフェが並ぶ
E.地方の“地元食”は素材の味がそのまま生きていておいしい
F.ラオスの人々にとって川は生活の糧だ



A



B

「東南アジア最後の秘境」といわれるラオス。この数年、ヨーロッパからの観光客が急激に増え、首都ビエンチャンや古都ルアン普拉バンは、もう立派なおしゃれアジア。こぎれいなカフェが軒を連ね、メコン川沿いには高級レストランやバー、ホテルが立ち並ぶ。フランス領だったこともあって食も文句なし。欧米人は自分たちのパラダイスを外につくる天才だ。

しかし、数キロ離れるとそこには別世界が。古き良き文化が脈々と受け継がれ、人々は自然とうまく折り合いをつけて暮らしている。敬けんな仏教国にして、オレンジの袈裟を着た僧侶による托鉢も日常の1コマだ。「カシヤン、トントン、カシヤン」道を歩いてみると、あちこちの家から機械の音が聞こえる。ラオスの田舎では、木製の織り機がまだまだ現役。カンボジアのクメール織りも、タイのシルクも、今はほとんどが機械に取って代わられているが、ここでは、女性たちが野良仕事の合間を縫って手で紡ぐ織物が、一家の貴重な収入源だ。

A.ラオスの伝統織りは、母から娘へ、見よう見まねで技術が受け継がれている
B.柔らかな色使いは森から得た自然の素材から生まれたもの

『素のラオス』に出会うなら、北東部や南部がお勧めだ。観光地ずれしていない静かで素朴なたたずまい、カメラを向けると照れて隠れるシャイな子どもたち。年配の日本人旅行者は「子どものころの日本のように、ここに来ると胸が熱くなる」と口をそろえる。

そんなラオスも、周辺のアジア諸国と同様、さまざまな問題を抱えている。その一つが不発弾。あまり公にはされていないが、ベトナム戦争では、アメリカ軍により『世界一激しい爆撃』を受けた。その時の不発弾が、いまだ大量に地中に埋没しているのだ。そのそばで元気に駆け回る子どもたちの姿を見ると、とても複雑な気持ちになる。国の専門機関や海外のNGOが除去作業を続けているが、とにかく広範囲で数が多く、今でも被害者が後を絶たない。

それでもラオスの人々は、日々たくましく、その負の遺産と対峙している。同じアジアの仲間として、もしわれわれに何かできることがあるなら、ぜひ力になりたいところだ。



J

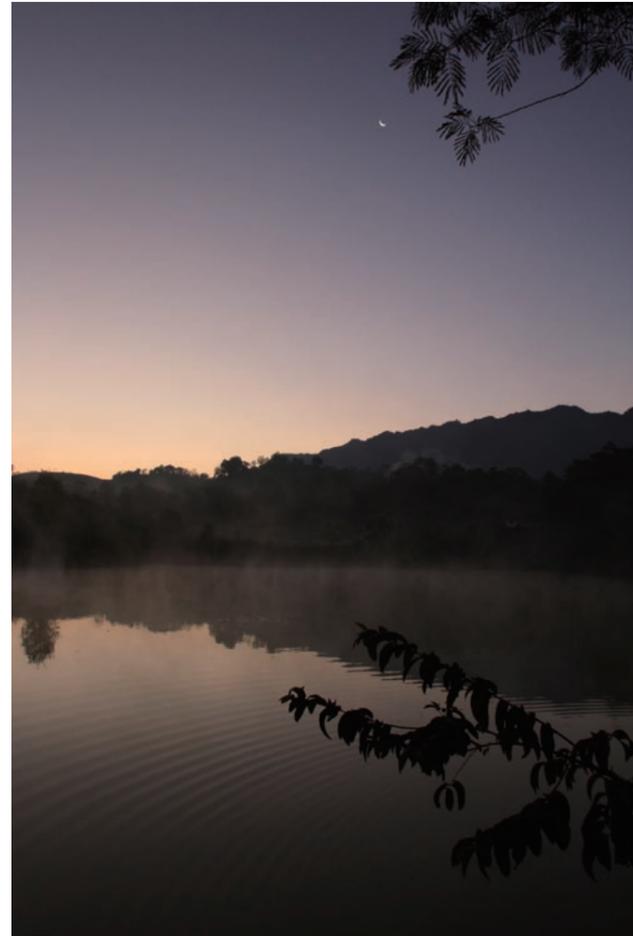
G. 不発弾は爆破して処理される
H. 日本人のルーツの一つといわれるモン族の女の子。肌色や表情もどこか似ている
I. 金属探知機を使って、地中深くに埋まった不発弾を探索するNGOのスタッフ



G



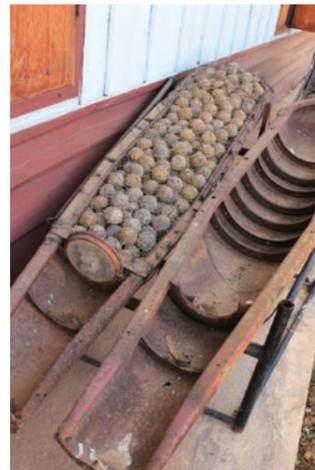
H



M



K



L

J. クラスター爆弾のケースをなんとプランターに再利用。彼らのたくましさを感じる
K. 不発弾の被害者が自作した”ホームメイド義足”
L. クラスター爆弾の中には小爆弾が何百発も詰まっている
M. 山紫水明。ラオスの自然は時間とともに美しい彩りを見せてくれる

人生の節目に
欠かせない行事と言えば

バーシー

STEP1



結婚式でのバーシー。パークアンを
囲んでみんなで祈り

結婚、子どもの誕生、転職…。ラオスの人々にとって、そんな人生の節目に欠かせないのが“バーシー”。正装で行う厳かなものから仲間うちの気軽なものまで、日常生活に根付いた儀式だ。

この儀式のために用意するのが、バナナの葉とマリーゴールドの花で作られた“パークアン”と呼ばれる祭壇。1.5メートルほどの長い糸と、短冊のように短い糸が何本も結びつけられている。昔は手作りだったが、最近は買うことが多い。

みんなでパークアンを囲んで座ったら、いよいよ儀式の始まりだ。祈禱師キトウが祈りをささげる間は、合掌した手に長い糸を挟んで一緒にお祈り。その後、短い糸を手に取り、結婚式なら新郎新婦、退院祝いなら退院した人など、まずはその会の主役に、それから参加者同士でお互いの手首に結びつけていく。

大切な人の門出を祝い、幸せ、健康、成功、厄除けなどを願う。気持ちを込めて糸を結ぶことで、人と人の心まで結びつける温かい儀式だ。



JICAラオス事務所の歓送迎会。職場でもよく行われる儀式だ

STEP2



お祈りの後、結婚式の参列者が新郎新婦の手首に糸を巻きつける

地球ギャラリー

ラオスの文化を知ろう!

ラオスの主食はもちゴメ。「カオニャオ」と呼ばれるこのコメを、手でつまんでおかずと一緒に食べるのが現地スタイル。豚、牛、アヒルのひき肉、川魚などを炒めた「ラープ」、生の青パパイヤとトマト、トウガラシなどを混ぜたサラダ「タムマークフン」、鶏肉の串焼き「ピンカイ」などが定番のおかずだ。

冷蔵庫がない家庭は、いわば“その日暮らし”。市場で買ったの食材、畑や川で手に入ったものなどを使って調理する。

その一つ、タケノコが採れた日に作られるのが「パッド・ノーマイ」。

パッドは炒める、ノーマイはタケノコという意味。豚肉、ニンニク、トウガラシ、大葉と一緒にタケノコを炒める。口に入れると大葉の香りが広がり、タケノコのシャキシャキとした食感がいい。

日本で本格的なラオス料理を味わえるのが東京・吉祥寺にある「ランサーン」。ラオス出身の官志明カンチミンさんが25年にわたり腕をふるってきた。この店では、ラオス流に手で食べるのが通。隣国のタイ料理を含め豊富なメニューを取りそろえている。

ラオス料理と言えば
大葉が香るタケノコの炒め物

パッド・ノーマイ



[RECIPE]

●材料(2人前)

豚肉(ロース) 100g/ニンニク(みじん切り) 2片/トウガラシ 1本/タケノコ(水煮) 250g/大葉10枚/ナンプラー 大さじ1/砂糖・塩・コショウ少々

- 油をひいたフライパンで、ニンニクとトウガラシを軽く焦げ目がつくまで炒める。
- ①に豚肉の薄切り、ナンプラー、砂糖、塩を加え、火が通るまで炒める。
- ②に薄切りにしたタケノコ、コショウ、少量の水を加えて軽く炒め、刻んだ大葉を入れて混ぜ合わせたら出来上がり。

[SHOP INFORMATION]



ランサーン

〒180-0004 東京都武蔵野市吉祥寺
本町1-32-9 吉祥寺モトハシビル2階
TEL:0422-21-8412
営業時間:11時半~14時(平日のみ)、
17時~23時
年中無休

イチオシ!

M OVIE

『スタンリーのお弁当箱』

舞台はインド西部の都市、ムンバイの小学校。おしゃべり好きな少年スタンリーは、クラスのムードメーカーなのに、お昼休みは一人ぼっち。みんながカレーや焼きそばなどおいしそうなお弁当を食べる中、彼は水道水で空腹を満たす。家庭の事情でお弁当を持ってこられないのだ。クラスメートはお弁当を少しずつ分けてあげようとするが、「弁当を持ってこられないやつは学校に来る資格はない」と先生に言われてしまい…。貧困や児童労働など、インドが抱える問題に光を当てつつ、子どもたちの温かい友情を描いた作品。



©2012 FOX STAR STUDIOS INDIA PRIVATE LIMITED. ALL RIGHTS RESERVED.

2011年／インド／96分
 監督：アモール・グブテ
 出演：バルソー、デイヴィヤ・ダッタ、ラジェンドラナート・ズーチーほか
 公開：6月29日(土)よりシネスイッチ銀座(東京)ほか全国順次公開
 URL：stanley-cinema.com/
 配給・問：アンブラッド TEL：03-6408-0625

E VENT

『地蔵ゆかり写真展：LIVING AT KILLING FIELDS ～キリングフィールドに生きて～』

2013年に国交樹立60周年を迎えた日本とカンボジア。この記念すべき年に開かれる本写真展では、ポル・ポト政権時代に虐殺が行われたキリングフィールド、大量に埋められた地雷、悪臭漂うごみ山、不十分な医療サービスなど、カンボジアの過去から今を写し出す。過酷な状況でも懸命に生きる人々を写した作品を通じて、カンボジアの真の姿をのぞいてみよう。

会期・会場：7月4日(木)～7月17日(水) キヤノンギャラリー名古屋
 7月25日(木)～7月31日(水) キヤノンギャラリー梅田
 8月22日(木)～9月3日(火) キヤノンギャラリー仙台
 9月12日(木)～9月24日(火) キヤノンギャラリー札幌
 問・TEL：各キヤノンギャラリーまで
 URL：cweb.canon.jp/gallery/archive/chikura-killingfields/

B OOK

『お母さんへ、世界中の子どもたちからプレゼント ～あなたのたいせつなものはなんですか?～』

世界中の子どもたちに“大切なもの”を描いてもらおう。医師として国際協力に携わる著者が始めたこの取り組み。青年海外協力隊員やNGOなどの協力を得て、72の国・地域から集まった約1万枚の絵の中から、母と子の関係をテーマにしたものを中心に収録。ニジェール、インド、マダガスカル、ツバル…各国から寄せられた絵には、夢、仕事、家族、そしてお母さんの絵がたくさん。母親から受けた愛情を同じように自分の子へと伝えてほしい。著者のそんな願いが込められている。



この本を
1人の方に
プレゼント
詳細は
38ページへ

山本敏晴 著
小学館
1,575円(税込)

B OOK

『僕は、七輪でみんなをハッピーにしたい』

ソマリアから逃れてきた約47万人が暮らす、ケニアのダダーブ難民キャンプ。著者は、NGOの活動の一環で、難民が働く七輪工場の運営を任された。しかし、従業員のストライキ、資金の横領、現地住民とのトラブル、部下の失踪と、次から次へと災難が降りかかる。時に怒り、絶望し、くじけそうになりながらも、少しずつ深まっていった人々との絆。それは、“助けてあげる弱い存在”ではなく、同じ人間として難民たちと対等に接したからこそ生まれたものだ。試行錯誤の連続だった600日を綴った一冊。



この本を
1人の方に
プレゼント
詳細は
38ページへ

黒岩揺光 著
ユーキャン学び出版
1,365円(税込)

読者の声

「4月号特集アフリカ「54の姿」を読んで」

■毎回、主人が職場から持ち帰ってきてくれます。中2、大1の子どもたちは興味を持って世界を知ろうとしてくれます。恵まれた日本に育つ子どもたちに発展途上の国々について考えてもらいたい。我が家にとっては大切な教科書です。これからも日本にいながら身近にできる国際協力を知る参考にしたいと思います。
(東京都/女性/52歳)

■「地域と世界のぎざぎざ」…秋田県小坂町の地域ぐるみで取り組む国際交流に興味を持ちました。小坂町といえば有名な鉱山の町。かつて日本の生産量を誇ったこともありますが、産業遺産の保存だけでなく、鉱山開発の経験を開発途上国に伝える活動にも取り組んでいると知り、とても勉強になりました。
(東京都/男性/61歳)

■「PLAYERS」…ブルキナファソは平均寿命も短く気候も厳しいため、どのような取り組みが行われているのかが気になっていました。緑を取り戻すための取り組みがされており、部分的でも改善が見られていて、NGOの活動がやかに素晴らしいか勉強になりました。
(福岡県/女性/33歳)

「5月号特集 BOPビジネス「新たな市場はココだ!」を読んで」

■足こぎ車いす、初めて知りました。移動の手段とリハビリを兼ねていることや、15年にもわたる東北大学の研究の成果に感動しました。そして、半身まひの女性の笑顔の写真がとても良かったです。この冊子だけで終わらず広くPRしたいですね。
(神奈川県/女性/45歳)

■日本にいて、世界のことはテレビ、新聞、インターネットで分かるが、それは表面の一般的なこと。「JICA's World」で深い意味での世界を理解できるのがうれしい。
(福岡県/男性/64歳)



本誌をご希望の場合は
下記方法で
お申し込みください。

申込方法

本誌をご希望の方には、送料をご負担いただく形でご送付いたします。巻末の払込取扱票に、氏名・住所・電話番号・ご希望の送付期間・送付開始月を明記の上、指定の金額を郵便局でお支払ください。入金の確認後、発送手配をいたします(入金から1週間程度かかることもありますのでご了承ください)。複数冊、またはバックナンバーをご希望の方は送料が異なりますので、下記までお問い合わせください。

申込先 (株)国際開発ジャーナル社 総務部(発送代行)
住所 〒102-0083 東京都千代田区麹町3-2-4 麹町HFビル9F
TEL 03-3221-5583
FAX 03-3221-5584
Eメール order@idj.co.jp

本誌へのご意見・ご感想や
JICAへのご質問を
お寄せください。

プレゼント
付き

添付のアンケートはがき、Eメール、FAXから、本誌に対するご意見やご感想、またJICAへのご質問を、氏名・住所・電話番号・職業・年齢・性別・ご希望のプレゼントを明記の上、お送りください。ご記入いただいた個人情報は統計処理およびプレゼント発送以外の目的で使用いたしません。当選者の発表は発送をもってかえさせていただきます。

◎応募締切：2013年8月15日

Eメール: jica@idj.co.jp
FAX: 03-3221-5584(『JICA's World』編集部宛)

- ① フィリピンのビーズのアクセサリ
- ② 書籍『お母さんへ、世界中の子どもたちからプレゼント～あなたのたいせつなものはなんですか?～』(p37参照)
- ③ 書籍『僕は、七輪でみんなをハッピーにしたい』(p37参照)



①



②



③

次号予告 (2013年8月1日発行予定)

感染症

国境を超えた脅威となっている感染症。その主な被害者となっているのは、保健システムが整備されていない開発途上国で暮らす人々だ。世界における感染症の現状と、それに立ち向かう人々の姿を紹介します。

JICA's World

JULY 2013 No.58

編集・発行/独立行政法人 国際協力機構 Japan International Cooperation Agency: JICA

〒102-8012 東京都千代田区二番町5-25 二番町センタービル

TEL: 03-5226-9781 FAX: 03-5226-6396 URL: http://www.jica.go.jp/

バックナンバーはJICAホームページ(http://www.jica.go.jp/publication/j-world)でご覧いただけます。

本誌掲載の記事、写真、イラストなどの無断転載を禁じます。



©Yuki Asada

ビーズ作りで明日への力をはぐくむ

平日の昼下がり。真っ青な空の下、キラキラ光るカラフルなビーズを手にする子どもたち。自分の好きな色を組み合わせ、一つ一つ、大切に大切に、糸に通していく。その表情は満面の笑みだ。

フィリピンの首都マニラから南東に300キロ。パイナップル畑が広がるのどかな田舎町ダエト。その一角にある保護施設「Halfway home」は、今日も明るい笑い声に包まれている。

しかしここに集まるのは、虐待などで心に傷を負った子どもたち。貧しい家庭で育ち、学校にも行けない。そんな彼らのために、算数や英語の勉強、遊びを通じて生きる力をはぐくんでもらいたいと、スタッフたちは懸命に汗を流す。

その一人、青年海外協力隊の木村みのりさんが取り入れたのがビーズのアクセサリー作りだ。「自分ですべてできる子どもいれば、そうでない子もいる。一人一人の能力に応じて、指導しています」。それまでベッドで一日中寝ていた子も、新しく熱中できることを見つけて、生き生きとした表情を見せるようになったという。

「自分の作ったモノを買ってくれる人がいると知って、自信がついたようです」と木村さん。技術だけでなく、整理整頓、仲間と協力し合う心なども学んでほしい。そう願っている。

小さな子どもたちのかわいい自信作、ぜひ一度手にとってみてほしい。



一つ一つのビーズに思いを込めて、丁寧に組み合わせさせていく

★ビーズのアクセサリーを8人にプレゼント!→詳細は38ページへ





私の
**なんとか
しなきゃ!**

Vol. 33

PROFILE

1962年大阪府出身。同志社大学法学部卒業後、中部読売新聞（現・読売新聞中部支社）に入社。退職後フリーライターを経て、2004年『ハゲタカ』でデビュー。『虚像の砦』『ベイジン』などヒット作多数。2011年、ニジェールの青年海外協力隊への取材内容が盛り込まれた『コラブティオ』を出版。「なんとかしなきゃ!プロジェクト」著名人メンバー。

私が小説家として、初めて本格的に原子力発電をテーマにしたのは『ベイジン』という作品でした。中国を舞台に書くことは決まっていたのですが、日本企業の進出といったテーマはほかでも書き尽くされている。今回の作品ではどこに注視すべきかを考えて、ここはやはり「エネルギー」ではないかと。爆発的な人口増加を受けて、中国がどのようにエネルギーを調達していくのか。もちろん、彼ら自身ですべて賄うことはできませんから、そこで日本とのかかわりを描くことができないかと思いました。

執筆に当たり、日本国内の原発事業者の取材を重ね、現場で汗を流す人たちからも話を聞きました。そこで強く感じたのが、この分野は世間では誤解されている部分が多いのではないかと。原発は非常にセンシティブなトピックです。ノンフィクションだと書けないこともあります。小説というフィルターをかけると、より深い本質的な部分を描くことができる。小説家が社

当事者意識を持って考える

小説家 真山 仁

MAYAMA Jin



© Yuki Asada

会問題を取り扱う意義は、そこにあると考えています。

私が物語を組み立てる時に焦点を当てるのは、世の中の“光”ではなく“影”の部分です。そうすることで、結果的に光が何かも見えてきます。ですから『ベイジン』でも、あえて原発を柱に据えました。もし太陽光発電を取り扱ったとしても、「夢の太陽光国家をつくれればビジネスチャンスも広がる」といった内容にはせず、「とんでもないことが起こる」と書いたと思います。ありえないと言われていることを起こせるのが小説。そうすることで、世の中の人々に警鐘を鳴らしたいのです。

すべてが“当たり前”になってしまっている社会の中で、危機感を訴えるのは大変難しいことです。『コラブティオ』の取材でウランの産出国である西アフリカのニジェールに行った時、夜になると町は真っ暗で、暗闇の中、道路脇を人々が平気で歩いていました。東京で暮らしていたらまったく気にならないことが、そこでは起こっているのだ

ということを実感しました。東日本大震災の後、東京の街が暗くなったといってもケタ違いです。

これだけエネルギーに依存しているにもかかわらず、それがどこで、どのように生み出されているかを知っている人がどれほどいるのでしょうか。私たちに今、これまで無関心だったツゲが回ってきているのではないのでしょうか。

福島事故が起きなくても、日本はエネルギー問題について考えるべき時にきていたと思います。私たちの生活は、電気なくして成り立ちません。この問題にどう向き合っていくべきか。地球の未来を変える力を発揮できるような気付きを、小説を通じて与えていければと思っています。

「なんとかしなきゃ!プロジェクト」は、開発途上国の現状について知り、一人一人ができる国際協力を推進していく市民参加型プロジェクトです。ウェブサイトやFacebookの専用ページを通じて、さまざまな国際協力の情報を発信していきます。

なんとかしなきゃ で 検索